寄稿

8月の種子島最大の祭り「種子島鉄砲まつり」には、当院の踊り連も参加します。

寄 稿

短歌入門

社会医療法人 義順顕彰会　会長　田上　容正

今年は昭和100年です。私は昭和10年生まれで、この原稿が『飛魚』に掲載される頃には満90歳になります。もし生きていればですけど。

私は家内と一緒に小さな医院を開いてから56年になります。
種子島の病める人のお役に少しでも立てればと思い家内に相談しましたら、一も二もなく賛同して呉れました。

開業してから二人ともそんなに体力もないのに、ただ一心不乱に働きました。
沢山の患者様が来て下さいました。誠意を持ち丁寧に、そしてやさしく接し、どんな患者も断らずに診療を続けました。
私の手に負えない患者と一緒に何回となくヘリコプターにも乗りました。

家内は薬剤師でしたが、職員の給料計算から医院の経理事務、４人の子供の面倒まで見ながら二人で力を合わせ頑張りました。私は暇を見つけてよく遊びました。ゴルフやボーリングをする傍らで、書道やコーラスに熱中しました。小学生の頃、学校の先生に教えられた通り、「良く学び良く遊べ」を実行しました。

そうこうするうちに、50年が過ぎ、5〜6年前より家内の物忘れが始まり、現在は種子島医療センターにお世話になっています。それ以前に家内は短歌の勉強をしていましたが、短歌教室にも通えなくなりましたので、代わりに私が短歌を始めるきっかけになりました。

私達夫婦のこれまでの歩みを短歌に詠んでみましたので拙い幼稚なものですが、『飛魚』の寄稿文として掲載させていただくことに致します。

「医の道」

一、木蓮が白い花びら咲かせおりその芳香（ほうこう）が鼻腔に匂う

一、野や山に色とりどりの花咲けりその営みに吾驚嘆す

一、桜花そぼ降る雨に濡れて散るその情景にしばし佇む

一、八重桜春の最後を飾るかな深紅の太い花びらつけて

一、白頭鳥（ひよどり）が桜めがけて突入す啄（ついば）んでおり蜜を求めて

一、故郷に還りて医療ひとすじに尽くし来たりて五十（ごじゅう）と五年（ごねん）

一、薬剤の仕事せし妻医師吾と小さき医院開きて久し

一、医の道は天の授けし道なればただひたすらに歩み来たりし

一、世の人の眞心ありて吾は生く吾も負けじと強く生きねば

一、強くあれ優しくあれと人に説きその言葉にて吾も生きに来

一、病む人の貧しき人の友となり過ごしし生も日暮となりぬ

一、心病むあまたの人を癒さむや住吉の丘に「せいざん」は建つ

一、校医とし奉仕せし日の馬毛の島あの頃の子等いまは何処に

一、陽が落ちてほの暗くなる馬毛の沖漁火（いさりび）に似し灯ともりぬ

一、夕暮れになれば心ふさぐらし静つと空見て涙ぐむ妻

一、コトコトと聞こえし妻の俎板（まないた）の音が消え去り久しくなりぬ

一、しとしとと春雨の降る眞昼すぎ庭に向いて余生を思う

一、限りある生命なりせば桜花ちからのかぎり咲きゆかまほし

一、残されし幾許（いくばく）もなき年月を妻看取りつつ歩いて行かむ

一、汝れは生く吾も生きねば人の世を心残りのなきを祈りて

令和七年三月

※短歌「医の道」は、令和６年度『南船賞』を受賞しました。

7年間の診療を振り返って

副院長　濵之上　雅博

2025年4月現在、最大の出来事はトランプ大統領就任により発生した関税による世界経済の混乱といえるでしょう。それと並行しウクライナ戦争・ガザ紛争の行き先の見えない予測不能な世界が広がっています。日本も少数与党のもと政治の指導力の低下が心配されています。このような世界では今まで隠されていた矛盾・問題が露呈されてきます。日本の医療も皆保険制度の維持のためには世代間の負担の矛盾が表面化し今後の経済・人口の拡大が望めない中、大きな修正が避けられないと考えられます。当院も病院スタッフの減少に伴い医療の質を担保しつつ現在の種子島の医療ニーズに応えるには医療の効率化・重点化が求められています。当院外科は、医師は大学より派遣があり人員は確保され現在の質をできれば高め、量としてもこなせるよう頑張っています。ただ病棟・手術室など外科治療にかかわるスタッフの減少に伴い負担が大きくなっていることが申し訳なくまた感謝する次第です。当院は熊毛地区の医療の砦としての役目を果たしており、その中で外科として腫瘍外科・一般外科・救急を担って診療を続けており、島内で求められる手術加療・がん治療を島内で完結できるよう努めています。

外科は2022年度から2024年3月まで佐竹霜一先生に手術・救急の中心として活躍してもらい、2023年度から2025年３月まで大久保啓史先生に外科主任部長として陣頭指揮をとってもらいました。2025年4月より松下大輔先生に外科部長として指揮を執ってもらっています。また、庄亮真先生、里井俊太朗先生が若手外科医として外科に加わり、新しい外科ができつつあります。外科医でもある院長の髙尾先生は、混乱する医療環境の中、馬毛島基地建設による島内医療の変化に対応されています。忙しい中でも外科治療に関し広く助言をいただいています。医療環境が厳しくなる中、安心して診療ができるのは医療経営が重要であり髙尾院長の指導力に感謝・感銘しています。社会の高齢化に伴い成人病としての“癌”が今後、死因として主たる疾患であることは間違いありません。癌の中でも消化器癌・乳癌・甲状腺癌の割合が高く外科で扱う主たる疾患となっています。また、当院は国より“地域がん診療病院”の指定を受けており、熊毛地区における“癌”の予防検診・適切な治療の導入・がん患者さんと家族の方の社会的支援などを行うことが求められています。コロナが明け外来にて高齢者の進行癌が発見される機会が多くなったように思います。コロナの社会が閉鎖された中で見つけられなかった癌が表面化してきているのかもしれません。癌治療に関しては、当科が担う手術療法・化学療法と呼ばれる薬による治療・放射線治療があります。放射線治療は鹿児島市内の病院と連携して行っており、手術療法は現在、腹腔鏡手術が標準術式となっています。

私は、肝胆膵領域の手術を中心に癌治療を行ってきました。肝胆膵領域の癌は難治癌も多く、他の領域の消化器癌より治療が難しいのが現状です。しかし肝癌・肺癌などの難治性の癌にも近年、免疫checkポイント阻害剤と分子標的薬と呼ばれる新規抗がん剤を用いた免疫化学療法が多数導入され適応のある患者さんには今までにない効果を認めています。化学療法は、手術療法と並ぶ重要な癌の治療法であり、当院においては種々の癌に対する化学療法に対し化学療法チームを組織し治療にあたっています。島外のがんセンターなどの医療機関から癌の治療を受けられた方の化学療法を含めた癌のcareを依頼される症例が増加しています。化学療法は、個々の患者で違う危険性を持っています。当院では、紹介症例を受け入れられるように化学療法を安全に行う環境整備を継続して行っており、化学療法にかかわるスタッフが診療科を超えて患者さんに良い環境で化学療法を受けていただけるよう体制づくりを行っています。

癌の状態に合わせて緩和治療を導入することが癌の治療にとって重要であることが示されています。当院では看護師さん、paramedicalのスタッフを中心に緩和ケアチームが組織されており、患者さんに寄り添った緩和ケアを目指しています。また大学で緩和医療を担っていた松下格司先生が指導をしてくれ専門的なコンサルトを受けてくれるようになりました。彼は私の同級生でもあり感謝しています。

現在種子島は馬毛島基地建設、種子島宇宙センターからのロケット発射による宇宙開発などが全国レベルで発信されています。馬毛島基地建設により西之表市の基盤が変わるほど人と物が流入し、それに伴う事故も想定されています。その中で医療の安心・安全を担保することが種子島医療センターの使命と考えます。困難な状況ではありますが、今後も熊毛地区の医療を守るためご支援よろしくお願いします。

私、濵之上は、約7年間当院にお世話になり４月いっぱいで退職します。在職中、当院関係者の皆様にお世話になり感謝しています。種子島医療センターの今後の発展を心より祈念しています。

令和6年度鹿児島県医師会長賞（看護業務功労）受賞に寄せて

看護部長　園田　満治

令和6年度の鹿児島県医師会長賞（看護業務功労）受賞は、中野美千代さん、橋口みゆきさんの2名でした。

外来　准看護師　中野美千代さん

昭和57年に准看護師資格を取得し、37年間鹿児島県で勤務されています。当院では29年間、外来担当として勤務していただき、種子島の離島医療に貢献されました。中野さんは持ち前のキャラクターで、医師や看護師、患者さんに愛され信頼されている存在です。

今後も体力の続く限り、持ち前のキャラクターを生かし、整形外来に受診される患者様の力となってほしいと思います。

3階東病棟　看護師　橋口みゆきさん

昭和60年に看護師免許取得後に名古屋で4年間勤務した後、平成5年種子島にUターンして当院での勤務を開始されました。穏やかな橋口さんは、後輩からの信頼もあり病棟師長等を歴任していただきました。今後も後輩の手本となり種子島の医療を支えていただきたいと思います。

左から田上寛容理事長、中野さん、橋口さん

種子島医療センターでの診療を振り返って

外科主任部長　大久保　啓史

2023年4月からの2年間、種子島医療センターで勤務させていただきました。

鹿児島生まれで鹿児島育ちの私ですが、種子島は、これまで訪れたことがなく、失礼ながら種子島宇宙センターの存在や鉄砲伝来の島ということしか知りませんでした。2年間生活し、成長期の子供達と離れた単身赴任は、寂しいものがありましたが、様々な経験が出来ましたし、種子島は非常に魅力的な島だと知ることが出来ました。

離島での勤務は初めてであり、陸続きでない土地ではその病院で完結した医療が求められることがあり、非常に不安に感じました。しかし、髙尾病院長、濵之上副院長のご指導と佐竹先生、金城先生の熱意ある診療、手術に助けられ、2年間勤務出来たことを有難く感じています。

種子島医療センターでの勤務が決まったときに、院内での手術件数を増やし、安全に手術を行うことを目標にしました。2年間で手術件数は増え、緊急手術が特に多くなりました。簡単に他院へ搬送出来ない当院で、いつも緊急手術に対応いただいた、麻酔科の先生、手術室スタッフには特にお世話になりました。この経験は今後の私の外科医人生において、とても有意義な経験となったと思います。

これまで出来なかったゴルフは、休日の楽しみであり、体力作りにもなりました。医局の先生方やコメディカルの方と一緒に回るラウンドはとても楽しかったです。この2年間で初心者だった私も趣味として今後も続けていける程度にはなったかと思います。

2年間と短い期間ではありましたが、医局の先生方、看護師の皆様、種子島医療センターに関わるすべての職種の皆様に感謝申し上げます。また、今後の種子島医療センターの発展を祈念申し上げます。

種子島医療センターでの診療を振り返って

外科医長　金城　多架良

2024年4月より種子島へ異動となり、早くも1年が経過しました。医師となって5年目にして初の離島勤務であり、戸惑いや不安もありましたが、諸先生方や看護師の方々、リハビリスタッフの方々、その他コメディカルスタッフの方々に支えられ、助けられ、何とか乗り切ることが出来た1年間でした。

種子島の人口は3万人、鹿児島市の約20分の1とはいえ、種子島医療センターは島唯一の二次救急指定病院であり、患者さんの数や運ばれてくる急患は決して少なくはありません。さらに近年は特に馬毛島の工事で島外・県外からも多くの人々が移動していることも影響して外科の手術症例も増加しており、前任地に続いて数多くの手術症例を執刀経験することができました。

この島に暮らす人々が入院や手術を要する事態に陥った時には、そのほとんどがこの病院に運ばれることになります。特に夜間や休日に当直・日直をしている時には、専門外の疾患を経験することとなり、当然ながら対処に困ることも多く、その度に他科の先生方には大変お世話になりました。深夜・早朝にも関わらず、快く相談やコンサルトを受けていただいた先生方には、本当に感謝の限りでした。

また私生活では、休日を利用して種子島内の観光名所を回りました。特に晴天の日の光や、夕日を反射して広がる海は美しく、海沿いで開催された医局のバーベキューは非常に印象に残った思い出の1つです。そして海と並んで美しさに感銘を受けたのは、夜空の星の光でした。小・中学生の頃、天文学に傾倒していたこともあり、季節ごとの星座やペルセウス座、オリオン座、しし座、ふたご座、しぶんぎ座といった著名な流星群を、過剰な街の光の影響を受けない夜空で堪能することが出来ました。

種子島と言えばやはりロケットですが、2024年度にロケットの発射を長谷公園から2回も見ることが出来ました。「世界一美しい」とも称される「種子島宇宙センター」からロケットが打ち上がる時、宇宙に向かって白い筋が続いていく様と何キロも離れているはずの発射場から響いてくる轟音、そして日本の技術と多くの人々の希望を乗せて宇宙へ消えていくロケットの姿は、私の脳裏に強く残っています。

種子島での1年間は私にとって大変貴重な経験となりました。ここでの思い出を胸に、これからも頑張っていきたいと思います。最後に、種子島医療センターの皆様、島民の皆様へ改めて感謝申し上げます。

種子島医療センターでの診療を振り返って

整形外科医長　脇丸　祐

2023年冬、整形外科医局長から電話があり次年度の種子島勤務が決まりました。初めての離島勤務で漠然とした不安がありましたが、部長の瀬戸山先生は研修医の頃から面識があったことに加え、今までに種子島へ行かれた先輩方の「すごくいい病院で楽しかったよ」という情報にわくわくしながら４月を迎えたのを思い出します。

当院は、種子島で唯一整形外科手術ができる施設であるため、島内の外傷のほとんどが運ばれてきます。大腿骨近位部骨折や橈骨遠位端骨折を始めとする一般的な外傷から、肩甲骨骨折の骨接合など少しマニアックな外傷や人工関節などの慢性疾患まで、たくさんの症例を経験することができました。外傷専門の瀬戸山先生の下で働いている間に、骨盤手術を経験したかったのですが手術症例が１件もなかったことが心残りです。

休日は、家族で種子島を満喫しました。ゴールデンウィークには、両親や姉弟家族と一緒に南種子の千座の岩屋やマングローブパーク、宇宙センター見学に行き、夏は浦田海水浴場で海水浴、鉄砲祭り、冬は南種子の宇宙芸術祭、Ｈ３ロケットの打ち上げを見に行きました。１歳の娘には、とても刺激的な1年だったと思います。公私ともに充実した１年でした。夏は湿度が高くムカデと羽アリに怯え、台風など天候次第で食料品や生活物資の物流が止まり、冬は風が強く気温よりも体感温度はかなり低いなどの、離島生活ならではの不便さもありましたが、それ以上に海がとてもきれいで自然豊かな居心地のいい島でした。

私自身至らぬ部分も多く、たくさんご迷惑をおかけしたかと思いますが、こんなに楽しく働くことができたのも先生方をはじめ病院スタッフの皆様のおかげだと思います。種子島での経験を仕事も含め今後の人生に活かしていきたいと思います。

島を離れるのはとても寂しいですが、いつかまた会える日を楽しみにしています。あっという間の1年でしたが、ありがとうございました。

種子島医療センターでの診療を振り返って

循環器内科医長　東　祐大

2024年4月より1年間勤務をさせていただきました。循環器内科の常勤医は、田上寛容理事長を除くと2024年度より薗田先生、小牟禮先生、東の2→3名に増員となり、手術室スタッフの協力もあって24時間体制での緊急冠動脈造影ならびに経皮的冠動脈形成術(PCI)の対応が可能となりました。

皆様もご存知の通りST上昇型急性心筋梗塞(STEMI)はいかに早期に再灌流を得られるかが生命予後改善のために非常に重要です。緊急PCIの件数自体は多くありませんでしたが、これまでヘリコプターなどで時間を要して搬送しなければならなかった方々に早期治療が可能となったことは非常に意味のあることと考えております。

この1年間を振り返ると、機械的合併症や心原性ショックで残念な転帰を辿られた方もいらっしゃいましたが、救命・社会復帰に繋げられた症例も経験できました。補助循環(IABP)や人工呼吸器管理等を要する重症例に対しては、どのように対応していくか今後も大きな課題と考えております。

外来に関しては、前任地が完全に開業医からの紹介型の病院だったため、かかりつけ医としての対応や予約外の飛び込み初診、内科外来など苦戦することも多かったですが、テキパキと動かれるクラークさん方に助けられ、何とかこなすことができました。

一方で、隣のブースでは田上寛容理事長が私とは比べものにならないくらい多くの患者さんを診察されており、本当にすごいと心から感じました。かかりつけ医としてのプライマリ・ケアを行いながら二次救急の対応も行うというこの環境はなかなか経験できないことであり、ここで医療を行う事の難しさ、厳しさを感じることは少なからずありましたが、貴重な経験をさせていただいたと思います。

また、実際に勤務して、種子島の医療は当院の様々なスタッフの努力や献身、想いによって支えられていることも実感しました。皆様、大変お世話になりました。当科での診療が、島民の皆様の健康寿命の延伸に繋がってほしいと願っております。ありがとうございました。

種子島医療センターでの診療を振り返って

循環器内科副医長　小牟禮　大地

2024年4月より種子島医療センターに赴任し、循環器内科医として1年間勤務させていただきました。初めて主治医として入院から退院までを1人で担当させていただき、何かと周りの方々にご迷惑をおかけする場面もあったかと思いますが、上級医である薗田先生や東先生、また各診療科の先生方、その他コメディカルスタッフの方々にサポートしていただき、1年間を終えることが出来ました。ありがとうございました。

今年度より循環器内科は1名増員となり、時間外の緊急カテーテル検査・治療が再開となりました。私自身もまだまだ未熟ではありますが、緊急の冠動脈造影検査(CAG)や一時ペーシング留置などを実際に術者として施行する機会をいただき、大変勉強になりました。その他にも薗田先生、東先生の丁寧で細やかな指導の元、恒久的ペースメーカ植込術や待機的な冠動脈病変に対する経皮的冠動脈形成術(PCI)も数例術者をさせていただき、非常に良い経験となりました。

循環器内科医としてだけではなく、週2回の一般内科外来と月に数回の救急外来の日当直を担当し、様々な症例を経験させていただきました。救急外来では肺炎や尿路感染症に加えて急性腹症や脳卒中など、内科外来では皮膚疾患や耳鼻科疾患、神経疾患、眼疾患など専門外の疾患も多く、悩む症例も多かったですが、いつ相談しても快く対応してくださる各診療科の先生方や一緒に内科外来や救急外来を担当するコメディカルスタッフの方々のおかげでなんとか乗り切ることができました。とても感謝しております。また、急性大動脈解離や急性僧帽弁閉鎖不全症などの心臓血管外科手術の必要な症例の夜間の自衛隊ヘリ搬送なども実際に経験させていただき、離島ならではの医療を実感することができました。

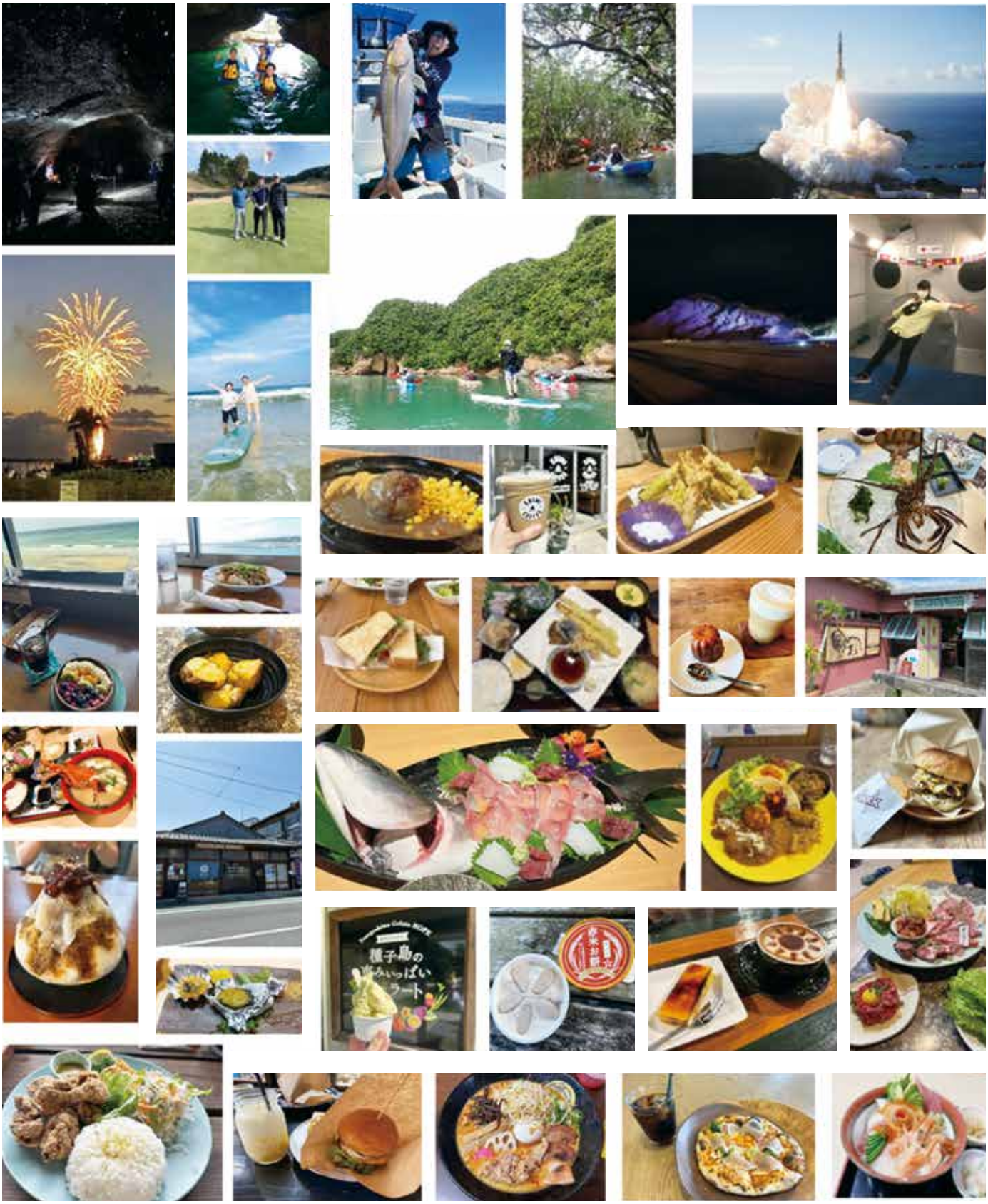
プライベートではこの1年で結婚し第1子が誕生と慌ただしくも充実した生活を送っております。子供が大きくなりましたら、観光でまた種子島に来たいと思います。

最後になりますが、この1年間に種子島で経験したことを今後の診療に活かしていきたいと思います。直接ご指導いただいた薗田先生や東先生、各診療科の先生方、コメディカルスタッフの方々、種子島医療センターの関係者の皆様、そして島民の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

研修医からの画像メッセージ

～研修医が選んだ、
種子島の医療と自然と遊び
そして食～

研修医の皆さんが種子島での思い出を画像で残してくれました。
診療や手術の様子、感動した風景、種子島ならではのイベントや
グルメなど、充実した研修ライフが伝わってきます。



種子島医療センターでの研修を終えて

2024年度は31名の研修医の方々が当院で研修をされました。
感想文はこちらのQRコードからご覧いただけます。

鹿児島大学病院　本田 七海
（研修期間：2024年4月）
鹿児島大学病院　今福 渚
（研修期間：2024年4月、5月）
鹿児島大学病院　飯野 友海
（研修期間：2024年4月、5月）
福岡大学　副島 太郎久
（研修期間：2024年5月）
南風病院　植田 直生
（研修期間：2024年6月）
鹿児島医療センター　石丸 綺梨
（研修期間：2024年6月）
鹿児島大学　松枝 奏茉
（研修期間：2024年7月）
鹿児島医療センター　松下 朋彦
（研修期間：2024年7月）
鹿児島医療センター　田中大智
（研修期間：2024年7月）
鹿児島医療センター　尾辻 良彦
（研修期間：2024年7月）
福岡大学病院　松尾 健人
（研修期間：2024年7月）
済生会松山病院　大政 洸星
（研修期間：2024年8月22日～9月11日）
鹿児島市医師会病院　池田 祐一
（研修期間：2024年9月）
福岡大学病院　宮里 衣望
（研修期間：2024年9月）
鹿児島大学病院　是枝 陸
（研修期間：2024年9月、10月）
済生会松山病院　大谷 通隆
（研修期間：2024年9月19日～10月9日）
福岡大学病院　橋本 周弥
（研修期間：2024年10月）
北海道大学病院　小澤 隼
（研修期間：2024年10月）
済生会松山病院　渡邊　誠
（研修期間：2024年10月17日～11月6日）
福岡大学病院　紙谷 雛子
（研修期間：2024年11月）
鹿児島大学病院　尾辻 香名
（研修期間：2024年11月）
鹿児島大学病院　濵田 良子
（研修期間：2024年11月、12月）
鹿児島大学病院　瀬戸 瑞稀
（研修期間：2024年12月）
福岡大学病院　松本 尚也
（研修期間：2024年12月）
福岡大学病院　井上 愛美
（研修期間：2025年1月）
福岡大学病院　古賀 匡貴
（研修期間：2025年1月）
福岡大学筑紫病院　寺井 誠
（研修期間：2025年1月）
福岡大学病院　古賀 匠
（研修期間：2025年1月）